

# “社会生活リテラシー”教育の構想

伊藤善隆・岩崎敏之・野口周一

## A Proposal for “Social Relation Literacy” Education

Yoshitaka ITO, Toshiyuki IWASAKI, Shuichi NOGUCHI

We call the ability to connect an individual to a group of people “Social Relation Literacy”. We show the necessity for “Social Relation Literacy” Education, and give some examples of the educational method. Especially PBL(Project Based Learning) is an effective method.

### はじめに

従来の、いわゆる“知識偏重”の教育を克服することは、現在の教育に関わる私たちにとっての大きな課題である。近年では、“知識”の獲得を目的とした“学習”だけでなく、獲得した知識の活用方法や、あるいは知識獲得の過程そのものを含めて“学習”と捉える見方が一般的になりつつある。

そこで、本稿では、そうした新たな“学習”について、“社会生活リテラシー”という概念を導入することを提唱する。すなわち、従来のいくつかの実践を踏まえ、短大・大学における“社会生活リテラシー”教育の重要性について問題提起を試みたい。

### 1. “社会生活リテラシー”教育の必要性

歴史的に振り返ってみると、近代日本における学校とは、“知識”を授けるための場所であった。ところが、最近では、学校に“知識”以外のものを求める傾向が強くなってきた。すなわち、“知識”は“学習”にとって必要な要素だが、“知識”のみが“学習”の目的ではない、という考えかたが一般的になりつつある。

では、その新たな“学習”の目的とは何か。抽象的に言えば、「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」<sup>(1)</sup>、「人間力」<sup>(2)</sup>、「常識力」、等々であり、具体的に言えば、「朝きちんと起きられるようにしてほしい」、「人の話を静かに聞くようにしてほしい」、「礼儀正しい態度を身につけさせてほしい」、「就学意欲や労働意欲を持たせてほしい」、などといった保護者の方々からの要望を満たし得るような“躰”や、“価値観”、“人生観”の確立、といったことまでが含まれると考えることができるだろう。

ところが、従来の常識でいえば、“躰”や、“価値観”、“人生観”、といったものは、学校の“授業”で教えられるべきものではなかった。しかし、たとえば部活動やボランティア活動などの「課外活動」において、あるいは友人や教職員との個人的な接触において、そういったことを学校で“学習”することはあった。あるいは、むしろ“授業”で覚えた“知識”よりも、そうした“授業外”で“学習”したことの方が、社会に出てから役に立ったり、思い出として記憶に残ったりしていることが多いのではないかとも思う。

とすれば、これからの社会の要求に応えるために、私たちは、そうした従来の“授業”という範疇

に入らなかった要素も、積極的に“授業”の中に取り込んでゆく、ということを今後の課題にしなければならない。そこで、注目したいのが“リテラシー教育”である。

“リテラシー”という言葉は、“読み書きの能力”という意味であり、場合によっては“運用能力”と訳されることもある。たとえば、“コンピューターリテラシー”と言った場合には、コンピューターに関する知識や、コンピューターを実際に活用する能力のことを指す。また、たとえば、近年では日本の大学でも“メディアリテラシー”という授業が定着しつつあるが、この“メディアリテラシー”という言葉には、画像や文字、音声などの情報を編集し発信するという側面と、発信されたメディアの情報を批判的に読み解いてゆくという側面の、両様の意味がある。

とすれば、今問題にしている「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」、「人間力」、「常識力」等々を身につける教育というのは、対社会的な“リテラシー”を身につける教育であると考えることができるだろう。そこで、そういったさきわめて実践的実践的な教育を“社会生活リテラシー”と捉えてみたい。つまりは、“社会で生きていく能力”の謂である。このように捉えてみれば、「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」、「人間力」、「常識力」といった、現在の社会では最も求められているにも関わらず、従来の学校教育がなかなかカリキュラムに取り組むことの難しかった要素とは、すなわち“社会生活リテラシー”であると考えることができるだろう。

もちろん、たとえばパソコンの運用能力のごく基本的な要素、それに日本語、英語の実践的な運用能力なども、現代におけるもっとも基本的な“社会生活リテラシー”であると考えることができる。たんに、パソコンや日本語、英語の“知識”があるというだけでは不十分なのである。ある程度

実際に“使える”ことが重要視されるのである。すなわち、ここ何年かのうちに新たに学校で試みられている教育内容のある部分は、視点を変えてみれば、広い意味での“社会生活リテラシー”の要素を備えていることに気付くはずである。

## 2. 課外活動と“社会生活リテラシー”教育

では、つぎに“社会生活リテラシー”教育の本質的な目標を、「課外活動」(部活動)と比較しながら考えてみたい。なぜ、「課外活動」(部活動)を比較の対象とするかといえば、先にも述べたとおり、従来の学校教育の中の「課外活動」(部活動)とは、“授業”のように“履修”する義務は課せられていないものである。そうであるにも関わらず、学校生活の中で非常に重要視されてきた。すなわち、“授業”では期待できない“教育効果”を発揮するシステムとして、「課外活動」(部活動)は確実に機能してきたのである。とすれば、従来の“授業”には期待できなかった教育効果とは何であるのか、そのことを確認するために「課外活動」(部活動)を例に取ってみたいのである。

そもそも、「課外活動」(部活動)の目標とは、本来的にはそれぞれの「課外活動」(部活動)で取り組んでいる活動の“成果”を出すことである。運動部にせよ、学芸部にせよ、それぞれの参加する大会、演奏会、あるいは展示会、発表会などで、なるべく高い成績や記録、評価を獲得することを目標に活動する。活動する主体である生徒・学生にとっての「課外活動」の価値とは、当然ながら活動の内容そのものである。野球部ならば野球をすることが、吹奏楽部ならば演奏することが、新聞部ならば新聞を作ることが、活動の内容である。参加する生徒・学生は、その活動内容に興味があったり、好きであったり、魅力を感じていたりすることが前提となる。

しかし、じつは一方で、「課外活動」(部活動)において重要視されるべきは、その“成果”だけではない。むしろ、「課外活動」(部活動)の教育的価値は、その活動の“過程”そのものにも求めることができる。たとえば、毎年、夏の甲子園大会で優勝する高校は一校のみであるが、だからといって、その優勝校以外の全国の野球部の活動が無価値であったということにはならない。また、興味深いことに、たとえ優勝したチームに所属していたからといって、必ずしも全員が野球を職業として選択するわけでもない。部活を通して鍛え育んだ技術なり能力なりが、自分の将来のキャリアに直接役立つということは、まずない。そうであるのに、部活動が重んじられるのは、記録や技術の向上という目標に向かって、工夫し頑張ったその体験・経験こそが、その後の人生においては重要な知見となると考えられているからである。

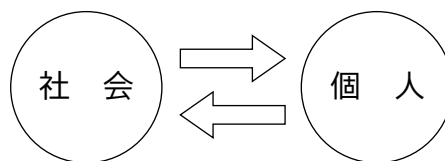
ここで注目すべきは、そうした工夫や努力をするにあたっては、“自分”が周囲とどのような関係にあるのか、すなわち“自分”と自分以外の人々＝“社会”との関係性が、いつも問題になるということである。たとえば、小さなチームであっても、その小さな“社会”の中での自分の位置付けがどうであるのか、という問題がある。また、全国のトップレベルの記録や成績と、自分の記録や成績がどれだけ開いているのか、という問題もある。そうしたことを常に意識しながら活動を行う。そのことが、その生徒や学生の人格を陶冶し、「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」、「人間力」、「常識力」、となると考えることができる。

ただし、「課外活動」(部活動)の価値観でいえば、あくまでも活動中は“成果”をあげることが目標である。これに対して、“授業”としての“社会生活リテラシー”では、自分と自分以外の人々＝“社会”との関係性を意識したり、考えたり、構築したりすることを重要視する。逆に言えば、“社会生活リ

テラシー”とは、この“他者との関係性”を意識してカリキュラム化される必要がある。そのことによって、従来の“知識”重視型の授業にくらべ、授業内容に“現実感”を持たせることも可能になる。そして、そのことは、短大・大学の授業としてカリキュラムに載せた場合、履修者の勉学意欲を大いに引き出す筈である。

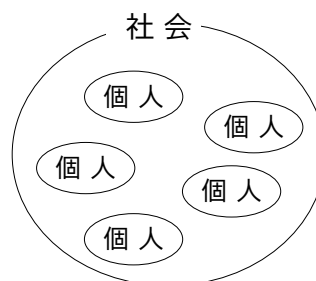
### 3. “社会生活リテラシー”の基本概念

さて、以上述べたように、“社会生活リテラシー”でもっとも重視されるのは、自分と自分以外の人々＝“社会”との関係性を意識しながら学習することである。“授業”として取り組む場合、“自分”と“社会”との関係は、図1のようにイメージする必要がある。



〔図1〕社会と個人が相渉り合う関係

しかし、じつは〔図1〕のように、自分とは社会に対して対等に渉り合うべき存在であるという認識は、意外に学生たちには一般的ではないようだ。反対に、〔図2〕のように考えて、自らを社会に埋没する存在だと考える学生は多い。



〔図2〕イメージされがちな個人と社会の関係

たとえば、履歴書・エントリーシートの「志望理由」や「自己PR」が上手く書けないという学生に話を聞いてみると、会社と自分との関係を〔図2〕のように捉えている場合が多い。そういった学生たちは、「志望理由」では自分の存在をなるべく小さく見せて組織に適応して働ける人間であるとアピールする（すなわち、どのような自己犠牲を払ってでもその会社に適応するとアピールしていることになるのである）ことが必要であり、反対に「自己PR」では自分の存在をなるべく大きく示すことが必要であるというイメージを持ってしまいうらしい。すなわち、そのようにイメージしてしまうと、「志望動機」の内容と「自己PR」の内容とは大変な矛盾であるように思われてしまい、どのように書いたら良いのか、分からなくなってしまうというのである。

たしかに、個人と社会の関係は、実際には〔図2〕のようなものかもしれない。現実的には、個人が集団に圧殺される場面に、しばしば遭遇する。しかし、“社会生活リテラシー”の基本概念は、あくまでも〔図1〕である。そう意識することが、対社会的な個人の確立には必要であり、結果的には現在の民主主義の世の中において、より良く、より楽しく、より面白く、社会で生きていくことにつながると考えるからである。そもそも、「論理的思考能力」、「問題解決能力」、「生きる力」、「人間力」、「常識力」等々を身に付けることが必要だと考えられるのも、現代社会において個人として主体性を持った生き方が理想とされるからであろう。

#### 4. PBLによる“社会生活リテラシー” 教育の実例

さて、従来の学校のカリキュラムは、知識を体系的に教えることに重点があった。しかし、社会生活リテラシーは、必ずしも知識の伝授に重きを

置くわけでない。そのため、従来型のカリキュラムのイメージの枠内には収まらない授業展開を工夫する必要が出てくる。その一つの方法がPBL (Project Based Learning) である。

そこで、ここでは平成17年度の生活プロデュース学科のゼミナールおよび生活プロデュース演習を通じて岩崎ゼミで企画・実行した湘北祭（本学学園祭）において、その出店を終えた後の学生の振り返りの内容を見ることにする。

以下の4項目についてAからLの12名の回答を列挙する。同じ記号の回答は同一人物のものである。

##### 1) 自分自身が頑張ったこと、工夫したこと、エネルギーを注いだこと。

- A…あまり役立たない。
- B…お客の呼び込み、材料の買出し、当日の手伝い。
- C…試作品の製造。
- D…いろいろ試作した。
- E…他の活動もあったけど、できるだけ関わった。  
シフト以外でも出た。
- F…ポスター、風船作り。
- G…事前準備、呼び込み、接客。
- H…シフト以外でも協力。
- I…ポスター、呼び込み、配達。
- J…お客さんの入りが悪かったので、外で注文をとって出前をする対応をした。
- K…シフトに関わらずフルに活動。
- L…試作、買出し。

##### 2) もっとこうの方が良かったと思える点。

- A…シフトを早めに決めて自分自身のやることを明確化。
- B…下調べを計画的にする。
- C…試作品製造などは家でやっても良かった。
- D…食担当部門だけでなく全員からの意見を聞いた  
り、伝えたりすれば良かった。
- E…しばんだ風船の対処方法を考えておけばよかった。
- F…呼び込みを外でも大きな声ですれば良かった。
- G…呼び込みの工夫。
- H…売込みが少なかつたかも。

- I…他の団体の活動と重なり準備や片付けに参加できなかつた。
- J…前売り券を作れば良かった。
- K…量とコストと金の管理をしっかりすべき。
- L…ゼミ全体がひとつになって進めていくほうが良かったかも。

3) 他のメンバーの行動や言動などで感心したこと。

- A…何も言わずにやるべきことをやる。いやなこと、大変なことでも、自ら名乗り出て行動。先を考えての発言。
- B…アルバイト経験者は接客が上手。他の子が気づかないところに気づいて進んで作業した子。
- C…当日シフト外の人が手伝いに来てくれた。
- D…買出しとか全員で協力。
- E…シフトの空きをカバーしてくれた人達に感謝。
- F…皆の接客態度、役割分担ができていた。
- G…みんながお客さんのために頑張った。
- H…午前中でシフトが終わっているのに最後まで残って手伝ってくれた姿に感動。
- I…特になし(自分自身が関われなかった)。
- J…無回答。
- K…自分のシフト以外でも来てくれたこと。
- L…自分の担当ではない場でも手伝っていた。

4) 来年度のゼミ生へのアドバイス。

- A…考えれば自分の役割が分かる、楽しくできるかどうかは自分次第。
- B…きちんと計画を立てて、役割分担をしておく、細かいことも書きとめておく。
- C…準備は早くから。
- D…何をやるかということをきちんと考えた方がいい。
- E…シフトを全員が把握しておくこと。
- F…天候の対応、値段の設定、材料の仕入れ量。
- G…しっかり計画、しっかり協力、天候、値段、材料、道具の買いすぎに注意。
- H…みんなで一つのことに協力し合えるのはすごくいい思い出になるから頑張してほしい。
- I…計画と準備が大事。
- J…室内で出店する場合は宣伝が必要。
- K…準備は早めに、お金、スケジュール、シフト、量、コストについては特に考え、全員で頑張らないと無理。
- L…楽しんでほしい。

以上の振り返りにおいて、学生達は大きく二つのことに触れている。一つは企画を実践することにあたっての計画および準備の重要性である。もう一つは、グループワークにおける他者やグループとの関わりについてである。そして、同様の振り返りは、リベラルアーツ科目群の中に設置された企画実践演習でも見ることができ、さらには授業科目外ではあるが、SHOHOという本学独自の体験学習の機会を得た学生の振り返りでも、同様の感想を聞くことができた<sup>3)</sup>。

話し合う・他者に意見を伝える・記録に残す・企画を形にする・その事前準備のために企画書をつくるなど、プロジェクトを実際に進めていく際に必要となる要素がまさしく“社会生活リテラシー”の要素と合致している。中でも話し合いの場や実際の作業の場においては、ノンバーバル(非言語)のコミュニケーションについて指導することの重要性も強く感じることもある。すなわち、PBLの実践課程の中では、言語、非言語を含む、幅広い意味での“ことば”を使いこなす能力を磨く機会を提供しているといことも意識しておきたい。

近年、授業における成績評価について、過程(プロセス)を評価することの重要性が指摘されている<sup>4)</sup>。先の「3. “社会生活リテラシー”の基本概念」で指摘したように、PBLが学生の任意かつ自主的な課外活動ではなく、カリキュラムの上で実施されるにあたっては、単に達成された目標の内容そのものを評価するのではなく、過程そのものを形に残すことを当初からの目標に掲げ、その過程に対する評価を重視することを意識的に行うべきであることをあらためて指摘しておきたい。

## 5. “社会生活リテラシー”教育のさらなる必要性

“社会生活リテラシー”の必要性は、今後ますます高まると考えられる。その理由として、情報インフラが整備されてきたこと、社会で働くことの形が多様化し始めた、などの要素を指摘することができる。ここでは、以下の2つの事柄について触れておく。

### 1) ICT (Information Communication Technology) の活用。

組織やグループの中で個人が関わる時、人と人とが関わる状況をつくるものとして、インターネット上での情報交換を無視することはできない。中でもSNS (Social Network Service) の存在に注視すべきである。たとえば、mixiというサイトは、巷間しばしば話題に取り上げられるように、この1、2年のうちで多くの登録者を集めている。そこでは、たとえば友人同士で日記を公開し合うというようなことが行われているが、任意にグループを形成して所属メンバー同士での情報のやり取りがなされる点に特徴がある。これを活用している学生も多く、おそらくは増加傾向にある。湘北短期大学のコミュニティーも存在し、そこでは在学生のみならず卒業生やさらには入学予定者も情報交換を行っている。こうした交流のための“道具”をうまく使いこなしてゆくためには、WEB上で形成されるグループと個人がどのように関わっていくかということを探求すること、すなわち“社会生活リテラシー”の視点が利用者に備わっている必要があることは言を俟たない。

### 2) キャリア教育の背骨となる“社会生活リテラシー”。

現在のキャリア教育においては、二つの素養が

学生に求められている。すなわち、自己啓発により“自分”を確立させることと、組織内でそのメンバーとして活動ができることである。社会で生きていくためには、その二つを統合して生きていく能力が必要だからである。その能力こそが、以上に述べてきた“社会生活リテラシー”である。じつは、二つのことを“知識”としてバラバラに学んだ場合には、それらを統合して理解することは、大人が考えている以上に難しいようだ。統合できない結果として、学生は戸惑い、迷い、場合によってはそこから先に進むことに躊躇することもある(すなわち、就職に漠然と懐疑的な気分を抱き、一時的にせよ就職活動を放棄してしまうといったケースがある)。初めから、個人としての自分の生き方と、社会(企業を含む)の中で生きるということ、一つのものとして考える機会なりモデルなりを提供することが必要であると考えられる。

## まとめ

“社会で生きていく”能力として“社会生活リテラシー”という言葉、概念を新たに提言した。PBL等の機会を適切に提供することで、学生の“社会生活リテラシー”を向上させることができることを主張したい。ここで提言する“社会生活リテラシー”は、高校、大学を含め広く一般に身につけることが望まれる概念であるが、とくに建学の理念の中に「実技を通じて智識のみでなく、世の中を生きていく、人を率いて行ける人柄を身につける教育」(故 井深大氏)<sup>6)</sup>を目指すことが掲げられている本学においては、まさに欠くべからざる要素であるといえよう。

“社会生活リテラシー”教育の構想

注

- (1) 野口周一『生きる力をはぐくむ—永杉喜輔の教育哲学—』（開文社出版 平成15年3月）参照。
- (2) 野口周一「少子・高齢化社会における教育問題についての一考察」（『新島学園短期大学紀要』25号 平成17年3月）参照。
- (3) 岩崎敏之「社会体験教育の実践例に関する考察 SHOHOの活動状況の振り返りと今後の展開について」（『湘北紀要』25号 平成16年3月）参照。
- (4) 吉田新一郎『テストだけでは測れない！ 人を伸ばす「評価」とは』（生活人新書 日本放送出版協会 平成18年3月）参照。
- (5) 湘北短期大学HP「建学の理念」による。